

# 要 望 書

令和3年8月2日

富山市長 藤井 裕久 殿

富山県天文学会  
会長 川口 勝之

## 要望内容：廃止された天文台に代わる新たな天体観察施設の早期整備について

初夏の候、ますますご清祥のことと存じます。

さて、表題の件、廃止された天文台に代わる新たな天体観察施設の、早期の整備を要望するものです。

富山市天文台は、昭和31年に日本で3番目の市民向け天文台として呉羽山に設置され、富山市民に天体観察の機会を提供する活動を60年以上にわたって行ってきました。富山市の多くの子供たちがこの天文台を通して星を観察し、理科に興味を持つなど、教育的にも非常に大きな貢献を果たしてきました。

一方で当会は、会員が星空を楽しむだけでなく、多くの市民の皆様、特に子供たちに星空の美しさやすばらしさを伝える活動を行ってきました。保護者や先生方からPTA活動や学校の宿泊学習で子供たちに星を見せたいという要望を聞き、会員が自分の望遠鏡を持ってボランティアで観察教室を引き受けるという活動を、50年以上にわたり行ってきました。また、富山市天文台設立当初から、星空観察の際に会員がボランティアで解説をするなど、大きく関わってきました。2018年には当会のこれらの地道な取り組みが認められ、「星空の街・あおぞらの街」全国協議会表彰の環境大臣賞もいただきました。

このような活動を行う中で、天文台の存在は大変重要でした。当会が行う移動型の観望会では、望遠鏡の性能や時間が限られるため、そこで興味を持ってくれた方には天文台を紹介し、「富山市天文台に行ってもっとたくさんの天体を見て話を聞いて下さい」と伝え、天文や科学への興味を深めてもらっていました。

天文台では子供から大人まで多くの方が宇宙への夢とロマンを感じ、新しいことが次々と解明されていく宇宙の面白さに触れることができました。気軽に質問でき、天文学の普及だけでなく、様々な知的好奇心を喚起してくれる施設でもありました。

しかし、天文台は道路が崩れたことで臨時休館となり、せっかく興味を持ってくれた方、特に将来のある子供たちに関心を深めてもらうこともできなくなりました。一刻も早く復旧することを望んでいましたが、復活することなく廃止となりました。

復活しなかった理由として、天文台が利用しづらい場所にあったことから、誰もが利用しやすい街中に移転を検討しているためとの話も聞いております。平成30年にこの計画の説明を受けましたが、よりたくさんの人に星を見てもらえると考えられるため、良いことであると思いました。その際、移転とともに天文台を閉鎖すると聞いておりましたが、実際は新施設が整備されないまま廃止となり、市民の天体観察の機会が失われている現状は、大変残念です。

そのため、一刻も早い天体観察施設の整備を要望するものです。特に、賑わいづくりで場所を決めるのではなく、子供たちの教育に効果的な場所として科学博物館の隣に設置し、専門の学芸員から解説が聞けるとともに、プラネタリウムやほかの理科教育との連携も図るのが良いのではないかと考えます。

以上の件につき、よろしくご配慮賜りたく、お願いいたします。

他団体からの賛同：

私たちも富山県天文学会が提出する本要望書に賛同します。

- 黒部天文同好会
- NPO 法人 富山県自然保護協会
- 金沢星の会

## 資料

富山市天文台略歴：

- 初代富山市天文台は、1956年（昭和31年）に富山市の呉羽山に開設。1954年（昭和29年）の富山産業大博覧会の「天体の変化館」閉幕後に前富山市役所屋上にドームと共に移設、その後初代天文台開設に伴い移設。設立に関しては富山県天文学会が1954年（昭和29年）に富山市に天文台を設置することの要望書を提出しています。
- 1979年（昭和54年）、富山市科学文化センター（現富山市科学博物館）オープンに伴い附属施設となりました。その後、呉羽山周辺の都市化が進み、天体観察が困難になり、1997年（平成9年）7月、富山市の三熊地内に移転リニューアルし、開館時日本最大級の口径100cm反射式天体望遠鏡が設置されました。
- 市民に開かれた天文台、自然とともにある天文台を活動理念にかかげ、夜間定期観測会や特別観測会等で実際の星空を観察する場を年間240日以上提供し、学校団体や一般の来館者に対して、また昼間もミニプラネタリウムや展示を使って星空への関心を高める活動を行ってきました。
- 天体の観測を通して良好な大気環境を保全することの大切さを訪れる人に伝え続けながら、広く市民に宇宙や星空に対する関心を高める活動を行い、2014年（平成26年）10月には来館者が20万人を超えています。
- 2018年（平成30年）9月より長期休館。同年9月に日本に上陸した台風21号や長雨の影響で、天文台と駐車場をむすぶ遊歩道の一部が陥没し通行不能となったためです。
- 2020年（令和2年）12月8日、富山市は市天文台について再開せずに廃止する方針を表明。2021年（令和3年）3月31日に廃止となりました。

富山市天文台の功績：

- 初期の頃は日本で最先端の試みが多数行われ、例えば1960年代に運用された冷却カメラは、当時の日本でプロ、アマチュアの天文家をあわせた中でも一番最初の試みでした。
- 1960年代にビデオカメラ映像を使った天体の解説にいち早く取り組みました。市民天文台の中では日本で最初の試みでした。当時月の映像を既に公開していたと記録に残っています。
- 水星の日面通過、部分日食の観測、彗星観測と記録、変光星などの天体現象の学術的な活動も盛んでした。
- 富山県内で発見された隕石を利用し、榎本武揚が作らせた流星刀に関する研究をおこなっています。
- 科学博物館と連携した天文普及教育を実施していました。
- 富山での天文現象の記録と保存をしてきました。

- 2013年（平成25年）には、全国で初めて、一般観覧者向けに人工衛星追尾機能を用いた「国際宇宙ステーション観測会」の定常的な開催を開始しました。
- 2016年（平成28年）に富山市天文台は「星空の街・あおぞらの街」全国協議会表彰の環境大臣賞を受賞しました。

#### 富山県天文学会：

- 富山市を中心とする県内外メンバーを含む天文愛好家のグループ。富山市天文台設立当初からその必要性を要望書として提出したという経緯があり、天文台開設後も観望会のボランティア解説、機器の運用など、多岐に渡って協力してきました。
- 会としては 70年にわたり富山県内各所で市民のための観望会を続けてきました。このような長期に渡る地道な活動は、調べる限り全国的にみて唯一の例で、国内の天文活動の歴史においても大変貴重であると言われています。
- かつて行われていた富山市天文台主催の移動天文教室にも、当初から当会の会員がボランティアとしてお手伝いさせて頂いてきたという経緯があります。
- 現在においても（コロナ禍以前には）年間20から30回程度の市民観望会を実施しています。これは全国的にみても稀に見る多さです。
- 立山黒部アルペンルートのスターウォッチングなどで星空のすばらしさを伝えているのは、富山県天文学会員です。地域観光にも大きく貢献しています。天文台の存在は、その講師の人材育成上においても非常に重要です。
- 2018年（平成30年）には富山県天文学会として「星空の街・あおぞらの街」全国協議会表彰の環境大臣賞を受賞しました。



天文台の望遠鏡を使って、昼間に見える星を観察しています。  
天文台職員が子供たちに解説をされています。



天文台屋上での星空観察の様子。  
富山県天文学会のボランティアが解説をしています。

近年の富山県天文学会の一年間の活動：

- 年間 20 回から 30 回程度小学校をメインに市民観望会を開催  
平均 25 回×90 名（子供たち、父兄、先生） = 約 2300 人
- おとぎの森+グリーンモール+環境財団で約 1000 人参加
- 立山のスターウォッチング：年間のべ約 60 回開催  
ホテル立山×14 回×100 名、弥陀ヶ原ホテル×14 回×60 名、立山高原ホテル×11 回×30 名 合計：約 2600 名
- 会員各自の立山での活動：ホテル立山×20 回×50 名 = 約 1000 人
- 近年の一年間での観望会の参加人数は 2300+1000+2600+1000 人 = 6900 人となる。

天文台をなくすことについて：

- 天文台の移転に際し、富山県天文学会へも市の方から説明がありました。その際、街中で再開するという前提で廃止するという内容を聞いていましたが、再開についての話が置き去りになってしまっているのが現状です。
- 富山での天文普及教育としての機関がなくなってしまうのは大変残念です。
- 天文現象を記録、保存していく機関が存在しなくなることを意味します。基礎研究・収集は、継続してこそ意味があり、これまでの天文史としての活動が途絶えてしまいます。气象台や博物館をいきなり廃止するのに相当することなのかもしれません。

- 理科教育離れが叫ばれて久しいですが、天文台に来てくれることで星にもものすごく興味を持つ小中学生がいます。その機会をなくすのは非常に惜しいです。
- 質の高い教育の機会を奪うことは SDGs の観点から言っても憂慮すべきではないかと考えます。
- 教育県を掲げている富山が天文台を廃止したことは、5年後、10年後に大きな反省点となる可能性があります。

#### 新しい天文台に対する意見：

- 理科教育施設、天文教育施設としての、市民に対する役割を果たすために必要と考えます。
- 研究、観測、記録など、天文台としての役割のために必要と考えます。例えば大学の附属観測装置として、重力波源・ニュートリノ源の探査としてのマルチメッセンジャー天文学を推進する 1 つの検出装置として活用することも可能性の一つにあると考えます。
- 上記のように、天文台が中心となる教育・科学コミュニティーを形成し、市民天文台としての意味合いとして、大きな「箱」の役割を担うと考えます。
- 科学館博物館の附属施設として、その敷地内に置くことで、より多くの人々に楽しんでもらえると考えます。
- 1メートルクラスの大口径望遠鏡にこだわらず、個人で持つことが難しい60センチメートル程度の天文台としては比較的小口径望遠鏡を採用し、稼働率を上げる方向（観測の自動化・リモート化）や取得費用を低く抑えた分施設維持に費用配分して、再開・継続する方法もあると考えます。
- 天体機器の技術が進んできており、電子観望と呼ばれる方法を使うと必ずしも空の暗いところでなくても、大型望遠鏡でなくても十分な観測が期待でき、リモート配信などの実現も容易となってきました。
- 天体映像の配信が可能になると、富山の空から見ることのできる天体を、学校や自宅から見てもらうなど、天文教育の機会を増やすことができます。
- 遠隔地の天文台との映像の相互交換などで、天気が悪い日も世界のどこかの天気の良い場所の天体を見てもらうことなどもできます。
- 昼間においても太陽を専用望遠鏡で観察したり、昼間に明るい星を見たりすることなども可能であり、さらにそれらを配信することで学校の理科の授業に使うことなども考えられます。

#### その他：

- 天文台不在の現在、科学博物館で毎週観望会を実施していますが、こういった地道な努力が大きく理科教育に貢献していると考えます。その中で、天文台不在のために大きな望遠鏡で宇宙の深部を見るという実体験を実施することができていないという現実があります。天文台が科学博物館近くにあるなら、こ

の実体験というある意味一番重要な部分を提供することができると考えられます。

- 富山市の隣接には世界最先端の研究をしているスーパーカミオカンデや KAGRA があり、富山市民にも宇宙に関心が広まっていることから、未来の研究者を育てるためにも天文台の存在意義は大きいと考えます。
- 2035 年 9 月 2 日の皆既日食が富山県内で観測できます。富山県内で皆既日食が見られるのは約 300 年ぶりのことで、その際には広く市民が集まることのできる施設、太陽を観測できる市民天文台があるということは、非常に大きな意義があります。
- 暗い空は天文にとって重要ですが、天文のみならず、野生動物の生態保護という観点からも非常に重要です。ぜひとも光害についての理解を深め、ダークスカイ運動を、市民レベルで認識してほしいと考えています。

参考：環境省光害対策ガイドライン

[http://www.env.go.jp/air/life/hikari\\_g/](http://www.env.go.jp/air/life/hikari_g/)